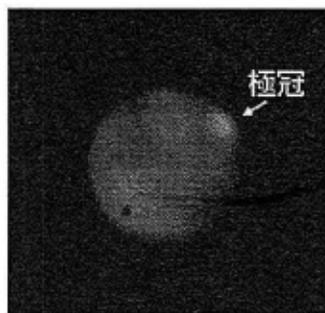


# 火 星

\*\*\*\*\*

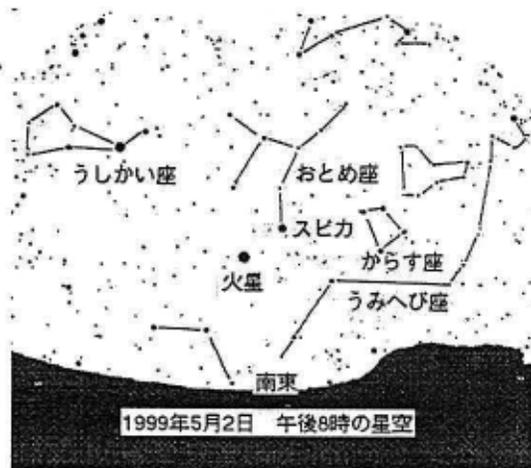
春の夕方、南東の空に赤く輝く星が見られます。これは、地球のすぐ外側をまわっている惑星で、約2年2ヶ月ごとに地球に近づき見頃になる火星です。この星は、その赤く輝く様子から、やや不気味なイメージで見られ、ローマ神話では戦いの神「マルス」に見たてられていました。



望遠鏡で見た火星

今年がちょうど近づく年にあたり、5月2日にもっとも近づいて大きく見えるようになります。このとき、火星はおとめ座付近に見られ、夕方から明け方まで、ほとんど一晩中見ることができます。また、この日に限らず、その前後1ヶ月ぐらいは見える大きさがあまり変わらず、火星の観察にもっとも適した時期となります。

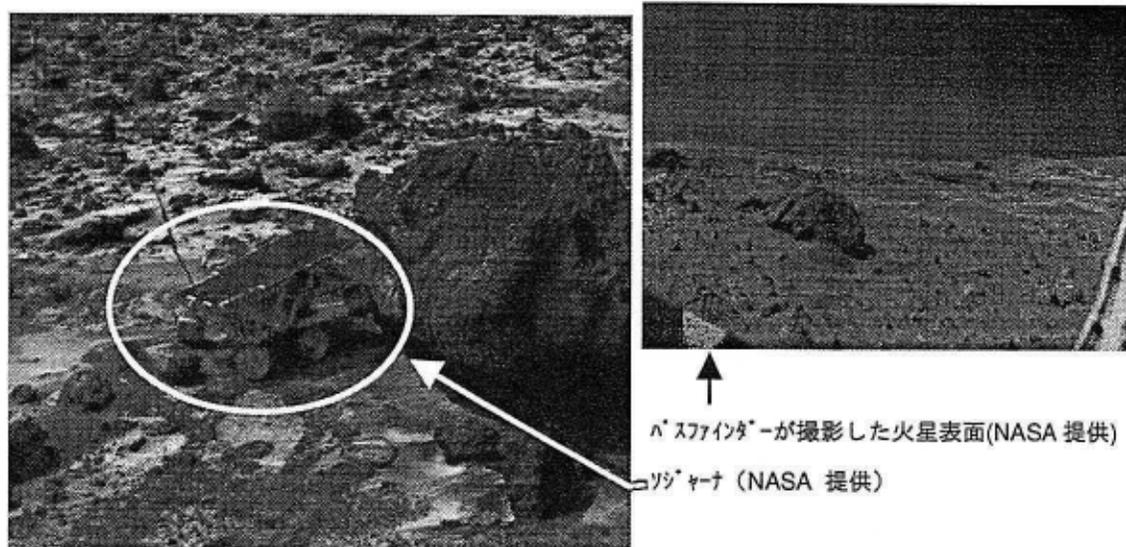
その見える大きさは意外と小さいものです。一番条件のよい5月2日頃でも、月の大きさの110分の1ぐらい、木星の3分の1ぐらいの大きさにしか見えません。それでも、空気のゆらぎの少ない夜には、天体望遠鏡で倍率を少しあげて見ると、赤い円盤像の中にかすかに白く見える極冠と呼ばれるもようや、やや色の濃いもようなどが見られる時があります。



火星の位置

火星は、実際の大きさが地球の半分ぐらいの惑星で、表面のほとんどは鉄分を多くふくんだ赤茶けた岩石でおおわれています。しかし、およそ24時間で自転していること、地球のように春夏秋冬の四季があることなど、他の惑星と比べると地球に似たところがあり、昔は火星人がいるのではと考えた人もいたくらいです。しかし、1976年、初めて探査機パイキング（アメリカ）が火星に着陸し、生物がいるかどうか調べましたが、「いる」という証拠は見つかりませんでした。ところが、1996年、火星から来たらしい隕石に生物の化石らしきものがあると発表されました。これには反対の意見も多く、まだはっきりしたことはわかっていませんが、これによって、火星への関心は高まりました。

また、ちょうどこの頃から、火星に向けて探査機が多く打上げられるようになりました。1997年7月、アメリカの探査機「マース・パスファインダー」が、ゴムボールのようにはずみながらというユニークな方法で着陸し、パイキング探査機以来、20年ぶりに火星表面の画像を送ってきたり、ソジャーナという小型の探査車を送り出し、周囲の岩石の性質などを調べました。



現在も「マース・グローバル・サーベイヤー」という探査機が火星上空をまわっていて、数多くの火星表面のくわしい写真を送ってきています。さらに、1998年7月に日本が打ちあげた火星探査機「のぞみ」、アメリカが打ちあげて火星の極冠の着陸をめざしている探査機「マース・ポーラ・ランダー」と火星の大気の様子をくわしく調べる探査機「マース・クライメイト・オービタ」の3機が火星をめざして飛行中です。ポーラ・ランダーとクライメイト・オービタは今年の12月、のぞみは2003年に火星に到着の予定です。これらの探査機が火星に到達し、新しいデータが送られてくれば、さらに、火星の様子がくわしくわかるようになるでしょう。 (布村克志)

科学文化センター プラネタリウム

「火星をめざして」 平成11年3月14日(日)～5月30日(日)

富山市天文台 観測会で6月上旬まで火星を観察できます。

毎週 木・金・土曜日 午後7時30分～9時30分



富山市科学文化センター

〒939 富山市西中野町1-8-31 TEL(0764-91-2123)

平成11年4月15日